

昼休みの日本語講座、「プチレッスン」

—日本語能力試験対策講座—

荒 まゆみ

“Petit Lesson” a lecture on Japanese during lunch time

—A lesson of The Japanese Language Proficiency Test—

ARA, Mayumi

Abstract

The purpose of many foreign students at Shobi university is to pass the Japanese Language Proficiency Test(JLPT), level N1. But it is difficult for them to be successful. So I began to give a lesson of JLPT 4 days a week, 15minutes during lunch time. I named it “Petit Lesson”. Attendance is voluntary. A student may attend as often as he/she wishes. It has been continuing for 3years(6terms). This is the report.

要 約

尚美学園大学の多くの留学生にとって日本語能力試験N1に合格することが卒業までの目標になっているが、実際に合格する学生は多くない。そこで、週4回昼休みの15分間、試験対策の講座を始めた。「プチレッスン」と名づけたこの講座への参加は任意であり、また好きなときに出席できる。すでに3年(6学期)続いている。その報告を行う。

キーワード

日本語能力試験 (Japanese Language Proficiency Test) level N1

プチレッスン (Petit Lesson)

機能語 (function word)

はじめに

2010年4月に学習支援室が設置され、私は日本語教育担当として、留学生の学習サポートを行うことになった。留学生のための図書、

特に日本語能力試験対策の問題集をそろえ、学生への貸し出しを行ったり、学習面の質問に来た学生の対応をしたりする部屋としてメディアセンター1階の一室が用意された。しかし、実際は数名の学生が顔をのぞかせただけで、問題集を持って質問に来た学生は1名

ただだった。掲示板を見ておらず、支援室の存在さえ知らない学生、また、学習支援室という名前だけは知っていてもこの部屋が自分たちに何をしてくれるのかわからないという学生が多かった。そこで、ただ学生を待っているだけではなく、彼らが積極的に足を運ぶようにしなければならぬと考え、昼休みの日本語講座を思い立った。留学生はほとんど授業の空き時間を作らないように履修登録をしており、また夕方はアルバイトのため学校に残る時間がない。そこで、昼休みの12時40分から12時55分の15分だけの、まさにプチレッスンを2010年12月8日から2011年1月26日までの23日間実験的に行ってみた。講座の内容は学生が最も反応を示す日本語能力試験対策にした。このときは私が教えていた1年と2年のクラスでアナウンスしただけだったので、出席したのはほとんど私のクラスの学生であったが、それでも口コミで広がり、延べ人数は23名（1年11名、2年9名、3年3名）となった。思いのほか学生の反応がよかったため、それ以降も続け、2013年で3年目（6学期）になる。

1. 昼休みの日本語講座、「プチレッスン」とは

この講座は、日本語能力試験対策のためのもので、私の出校日の月曜から木曜までの毎日、12時40分から12時55分の15分間行っている。昼休みの、しかも15分だけの短時間であるため、Petit Lesson（プチレッスン）と名付けた。春学期と秋学期、それぞれの学期が15週間なので、1学期に50～60日間の開講となる。1年間となると、息切れしてしまう学生も半年ごとだと無理なく出席できるだろうと考え、半年ごとにした。2010年の秋学期に実験的に行ってから、2013年春学期で、

6学期（3年）になる。この講座に参加するかどうかはもちろん任意である。また、何回出席しなければならないという強制もない。参加者には来た回数がかかるようにカードを渡し、来たときにハンを押している。一応10回をめどにし、10回でプチプレゼントがもらえるようにしている。これはどこかで達成感を得させたいと考えたためである。

2. プチレッスンで何を教えるか

2.1 日本語能力試験N1とは

「日本語能力試験」(Japanese Language Proficiency Test)(以下JLPT)は留学生が大学に入るために必要な日本語力を測る試験として(各大学の入学試験を別にして)行われてきた。さらに国立大学受験者は「私費外国人留学生統一試験」という大学入学能力を測る試験も受けなければならなかった。しかし、2002年からこれら2つの試験に代わり、留学生は「日本留学試験」と呼ばれる試験を受けるだけでよくなった。この日本留学試験は年2回(6月と11月)行われ、日本語学校では高得点がとれるようにカリキュラムに試験対策を入れ、初級の勉強が終わるとすぐに始める。この試験は文系と理系に分かれ、文系には「日本語」「総合(社会)」「数学コース1」の3科目、理系には「日本語」「理科2科目」「数学コース2」がある。必要な受験科目数は各大学によって異なる。中にはこの「日本留学試験」を課さないところもあるが、多くの大学はこの試験の得点(特に日本語)を合否の基準にしている。尚美学園大学では文系3科目のうち「日本語」を受験していることが条件で、点数としては400点満点中200点以上が求められている。しかし、この試験はあくまでも大学受験に必要というだけで、「日

本語」の科目はアカデミックジャパニーズに限定される。そのため、日本でビジネスを行っている外国人や、日本語力を測りたい一般の外国人はJLPTを受験する。JLPTは国際交流基金と（財）日本国際教育支援協会が運営をしており、日本を含めた64か国で実施され、日本語能力を測る試験として一番認められた試験である。大学に入った留学生が日本で就職する際、また、帰国して、日本へ留学した証として示せるのがこのJLPT最上級N1の合格である。

2.2 尚美学園大学留学生のJLPT、N1合格者数

毎年、新入留学生の日本語クラスで大学4年間の目標をアンケートにとると、JLPTのN1合格と書く学生がほとんどである。尚美学園大学の受験条件となっている「日本留学試験」の「日本語」の200点はJLPT N2に合格できるかどうかというレベルである。2010年にJLPTが改正され、今までの年1回の試験が2回になったとはいえ、尚美学園の留学生にとって卒業までの4年間でN1に合格することはたやすいことではない。合格者数を見ると、2009年度27名（学部留学生総数467名）、2010年度13名（学部留学生総数476名）、2011年度15名（学部留学生総数430名）、2012年度17名（学部留学生総数382名）となっている。

2.3 日本語能力試験(JLPT)N1対策

JLPTの試験科目は言語知識（文字・語

彙・文法）・読解・聴解からなる。言語知識（文字・語彙・文法）60点、読解60点、聴解60点で各得点区分においてそれぞれ19点を下回らず、3科目で100点以上が合格となる。新試験になってからの尚美の合格者の科目別平均点を見てみると、2010年に合格した13名の平均点は言語知識35.6点 / 60点、読解37.3点 / 60点、聴解47.4点 / 60点、2012年合格者17名の平均点は言語知識36.1点 / 60点、読解32.2点 / 60、聴解44.4点 / 60点となっている（全合格者の平均点は公表されていない）。受験した尚美留学生の話を見ると、読解が難しかったと言う声が多い。また、文法的項目である機能語（下記問題例）が苦手だという学生の声も多い。機能語には接続助詞の働きをする「～ものを」「～といえども」「～もさることながら」や係助詞の働きをする「～ときたら」「～に至っては」「～とは」、また助動詞と同じ働きをする「～ずにはおかない」「～にはあたらぬ」「～ではいられない」など数多くの表現がある。文を構成するために必要な要素となる機能語が理解できれば、読解力のアップにもつながる。15分という短時間であり、出席する学生も日々変わることを考え、プチレッスンでは特にN1の機能語（N2も含む）を2つずつ導入することにした。導入する機能語はJLPT1級（2009年度までの旧試験）の出題基準⁽¹⁾から提出している（改正後のJLPT、N1は出題範囲を明らかにしていない）。また、漢字の読み、語彙、副詞と文末の呼応などにも触れている。

2-3-1 実際に行っている問題

次の問題は実際に15分のレッスンで行っ

(1) 旧日本語能力試験の改訂版文法出題基準 [文法的な 機能語 の類] 1級(サンプル) で99の機能語が、また、2級(サンプル) では170の機能語が挙げられている。注として1級の試験には2級以下の事柄もかなりの程度出題されると書かれている。

昼休みの講座

文法①



I ~や否^{いな}や (～や)、～ (辞書形+や否や、～とすぐ)

1. その薬を飲む^{いな}や否や、急に眠気が襲ってきた。
2. 開店のドアが開く^{いな}や否や、客はなだれのように押し寄せた。
3. 彼をひと目見る^{いな}や、30年前に別れた恋人だと気づいた。
4. 学生は授業が終わる^{いな}や否や、_____。
5. _____ 消防車は出動した。

II ~をものともせず (に) (困難に負けないで)

1. その家族は貧乏をものともせず、明るく働き続けている。
2. 数々の困難をものともせず、彼はとうとう成功を収めた。
3. 彼らのヨットは嵐をものともせず、荒海を渡り切った。
4. 彼は、_____をものともせず、1か月の入院生活を乗り越えた。
5. 危険をものともせず、_____。
6. 周囲の批判をものともせず、_____。

ているものである。毎回B5サイズのプリントを1枚渡し、2つの機能語を導入している。これは「ばら」バージョンだが、その他「ゆり」「すみれ」「犬」「猫」などのバージョンがある。かなりのプリント数になるため、自分の整理のためと学生にもわかりやすくするため、絵で仕分けをしている。一つのプリントに載せる機能語の選択はランダムである。数多く出版されている問題集の中には、項目別に整理されているものもあるが、整理して出題しても同じ学生が毎回出席するわけではないので、とにかく数多くの機能語に繰り返し当たらせて、覚えさせることにしてい

る。

15分間の流れは機能語の導入、短文作成、文法、漢字、語彙の確認となっている。まず、上のプリントの機能語「～や否や」の導入であるが、意味と用法を簡単に説明する。JLPT、N1には似ている意味の機能語がいくつかあるので、それも提示する。たとえば、の「～や否や(～や)」は「～するとすぐ」の意味だが、この機能語と類似するものに「辞書形⁽²⁾+なり」「辞書形+が早いか」「ます形⁽³⁾+次第」「た形⁽⁴⁾+とたん」などがある。学生はこれらの機能語を授業等で目にし

(2) 外国人に日本語を教えるための日本語文法では、国文法の終止形、終止形と同じ形の連体形を辞書形と教える。

(3) 外国人に日本語を教えるための日本語文法では、国文法の連用形をます形と教える。

(4) 外国人に日本語を教えるための日本語文法では、国文法の連用形の音便+タになる形をた形と教える。

たこともあるはずなので、まず学生から引き出す、出てこないときは教師が提示する。次に、いくつかの文を作らせる。時間が限られるので、前件か後件は事前に提示しておく。「～や否や」に関しては過去の試験で「～や」で出題されたことがあり、何人かの学生は並列の助詞だと思ったという。しかし、並列の助詞「や」が直接動詞の辞書形に付くことはない、基礎的な文法知識があれば、そのような間違いはしない。また、「学生は授業が終わるや否や」の後件文を作らせると、「教室を出た」という文を作る学生がいる。これでは前件と後件でスピード感が異なってしまう。したがって、「教室を飛び出した」という複合動詞にすることで前件と後件のバランスが取れることを理解させる。漢字の読みはその都度確認する。たとえば、ほとんどの学生が「眠気」を「ねむき」と読んでしまう。その他「き」が「け」になるものとして吐き気や寒気を挙げる。一つの漢字の音読みと訓読みの確認、2通りの読み方があるものはそれも確認する。たとえば「危ない」は読めても「危うい」が読める学生はほとんどいない。時間があれば、用法の違いも説明する。また、語彙に関しては、「地震に襲われる」「成功を収める」など、慣用的な使われ方をするものは特に注意して提示している。その他、比況の文型「なだれのように」、複合動詞「押し寄せる」「渡り切る」「乗り越える」、副詞「とうとう」と類似する「やっと」「ついに」も挙げる。これらのボリュームを15分で行っている。N1に出題される機能語は100以上あるが、細かい使い分けは問われない。したがって、意味を理解させ、いくつかの文を作らせるだけにとどめている。数多く出席している学生は同じ機能語に出会うことも多く、確実に覚えていっている。

2.4 日本語の運用力をつける

この講座はJLPT、N1対策として行っているものであり、1人でも多くの学生を合格させるためのものではあるが、実際は日本語の基礎力を伸ばし、運用力をつけることが本来の目的であると言える。この講座を始めて学生に思いがけず気付かされたことでもあるが、初級項目が抜けている学生、理解できないままここまでできてしまった学生も多く、試験対策以前に基本的な文型を教えなければと痛感させられた。多くの漢字が読めるようになり、表現力豊かな語彙を身につけることは試験合格のために必要ではあるが、それ以上に日本語力をつけるためには大切な能力である。また、機能語を覚えることは必要だが、学生は試験が終われば多くの機能語を忘れてしまう。したがって、機能語の導入だけではなく、それを通して日本語の文型を身につけさせなければ、せっかくの勉強も無駄になる。遠回りのようだが、結局は推量、条件、様態、変化、推移、伝聞、理由といった初・中級の日本語文型を押さえながら機能語を導入しなければ、運用力は伸びない。条件文の条件節「もし～たら」「たとえ(いくら、いかに、どんなに)～ても」を押さえてから「たとえ今から行ったところで、間に合わないだろう」という「～たところで」という機能語を使った文を導入することで、たとえ「～たところで」を忘れても、副詞の「たとえ」を見れば「～たところで」の意味を推測することは可能である。実際に、出席回数が多い学生は「いかに困難な状況にあったといえども、罪を犯したことは許されない」「たとえ地震が起ころうと、このビルは安全なはずだ」「どんな権力者であれ、いつかは命の終わりが来る」という機能語が出てきても理解できるよ

うになる。また、学生にとって理解しにくい文法項目の自動詞と他動詞の使い分け、授受動詞、使役、受身などにも触れている。彼らは受身形や使役形は会話ではほとんど使わずに過ごしている。「帰らせていただけませんか」というべきところを「帰ってもいいですか」で代用したり、自動詞と可能形を混合させ「このふた、開かない」というべきところを「開けられない」と言ったりしている。日本語クラスでこの動詞の変化の練習問題をさせると、動詞の活用さえ間違える学生も多く、特に「帰らせて」は何度注意をしても「帰させて」となってしまう。いかに使役形に慣れていないかがわかる。

3.参加状況

表1は今までの参加人数を学年別に表したものである。各学期の参加延べ人数は20名前後となっている。学年別で見ると1～2年の参加が比較的多いことがわかる。2013年春学期には3年が7名と各学期に比べ多くなっているが、このうち5名は3年からの編入生である。編入生の中には日本語能力の不足を感じている者が多いということも言える。表2は2013年春学期の1日ごとの参加状況を表にしたものである。この学期はプチレッスン開始日から2週間たっても学生が出席して

いない。このようなことは例年には見られないことであった。この理由として考えられる例年との違いは、キャンパス統合と学習支援室の移動だが、その後、学生から学食が混んでいて昼休みに勉強に来る時間がなかったと聞かされた（キャンパス統合で新学期早々の頃は学食も混雑したようであった）。結局、3週間目からは例年通りの参加状況となったが、昼休みの短い時間での講座なので、いろいろな環境の変化に左右されるのだということを実感した。しかし、この学期も多いときは7～8名参加している。2011年春学期から2013年春学期までの5学期で見ると、1日の出席人数は0～9人と幅があるが、平均すると1日2.72人となっている。0人のときは総開講日数272日のうち20日だけである。

4.成果

次に出席回数と試験の合格率との関係を見てみる。まず、1人の学生がこの3年間に何回出席しているかを見ると、試験的に行った2010年の秋学期を除く5学期の参加者85名中、30回以上が5名、20～29回5名、10～19回19名、10回以下56名となっている。図1はその割合をグラフにしたものである。カッコ内はJLPT、N1合格者の人数である。これを見ると、10回も出席していない学生が

表1 各回の参加延べ人数、及び学年別内訳

	参加延べ人数	1年	2年	3年	4年
2010年12～1月	23名	11	9	3	0
2011年春	16名	3	3	6	4
2011年秋	15名	9	2	3	1
2012年春	20名	8	4	3	5（うち大学院生1）
2012年秋	19名	8	5	3	3
2013年春	25名	4	12	7	2

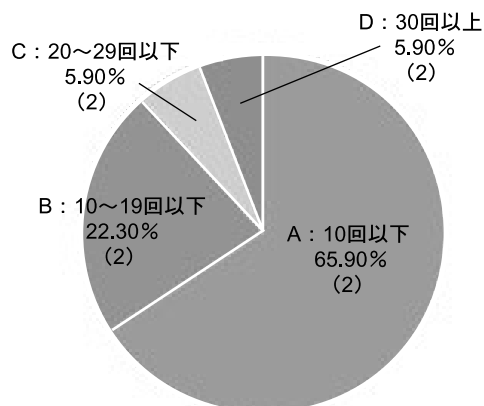
表2 開講日ごとの参加人数 (2013年春学期)

開講日	参加人数	開講日	参加人数	開講日	参加人数	開講日	参加人数
4/ 8(月)	0	5/ 7(火)	2	6/ 3(月)	3	7/ 2 (火)	5
4/ 9(火)	0	5/ 8(水)	6	6/ 5(水)	6	7/ 3(水)	4
4/10(水)	0	5/ 9(木)	4	6/ 6(木)	3	7/ 4(木)	2
4/11(木)	0	5/13(月)	4	6/10(月)	4	7/ 8(月)	7
4/15(月)	0	5/14(火)	5	6/11(火)	4	7/ 9(火)	1
4/16(火)	0	5/15(水)	5	6/12(水)	7	7/10(水)	4
4/17(水)	0	5/16(木)	1	6/13(木)	0	7/11(木)	2
4/18(木)	1	5/20(月)	3	6/17(月)	8	7/15(月)	6
4/23(火)	2	5/21(火)	6	6/18(火)	5	7/16(火)	0
4/24(水)	0	5/22(水)	3	6/19(水)	3	7/17(水)	2
4/25(木)	1	5/23(木)	3	6/20(木)	2	7/18(木)	3
4/29(月)	3	5/27(月)	1	6/24(月)	4	7/22(月)	3
4/30(火)	6	5/28(火)	3	6/25(火)	4		
5/1(水)	2	5/29(水)	5	6/27(水)	2		
5/2(木)	4	5/30(木)	2	7/ 1(月)	5		

65.90%と全体の半数以上を占めており、N1合格のための勉強の継続がいかに難しいかわかる。しかし、わずかに1割強の学生ではあるが、20回、30回と参加する学生もいる。30回以上の5名のうち2名は3学期にわたり70回、80回と出席している。このように数学期にわたり参加する学生も多く、2学期参加17名、3学期参加6名となっている。2013

年7月に行われたJLPTの結果まででN1に合格した学生を見てみると、5学期の参加者85名中8名が合格している。図1を見ると、それぞれの出席回数で2名ずつ合格しているが、割合で見ると、20～29回以上、30回以上出席者の合格率はそれぞれ40%、10～19回は10.5%、10回以下3.5%となっている。出席回数が多いほど合格率も高くなっている

図1 1人の学生の出席回数内訳 ()内はJLPT、N1合格者数



(5学期中70回、80回と最多出席の2名は合格)。10回以下の出席で合格した2名は私の日本語クラスの学生ということもあり、他のクラスメートと数回出席したが、もともと日本語能力の高い学生であった。また、まだ大学に在籍していてこれから受けようとしている学生もかなりおり、彼らが卒業するまでに合格する可能性は大いにある。このプチレッスンに参加している学生は、同時に学習支援室内の図書の借り出しも多く、JLPTだけではなく、BJTビジネス日本語能力試験(Business Japanese Proficiency Test)、JSSTアルクの電話による日本語会話試験(Japanese Standard Speaking Test)を受ける学生もいる。15分のレッスンに10回参加して、総時間2時間半である。これだけでN1に合格することは難しいにしろ、同じくレッスンに来る学生と国は違えど、良い関係を築いている学生、勉強を楽しんでいる学生も多い。受講回数の多い学生は大切なポイントを押さえ、普段あまり使わない無機質な機能語を楽しむ余裕さえ出てくる。

5.おわりに

今回データをまとめてみて、せっかく学習支援室に足を運び、勉強しようという意欲を見せる学生でも65%が10回も出席していな

いことがわかった。一方、JLPTのN1に合格するまで、あるいは合格への手ごたえを感じるまで通ってくる学生もいる。また、参加者は1年生が多い。4年生が来たものの、自分よりできる1年生がいると、気後れして来なくなる学生や、いわゆる常連の学生同士が楽しそうにしている中で、おとなしい学生が来なくなるというケースもあるが、時間的な自由さという面で足を運ぶ学生が多い。問題集などの図書をさらに増やし、学生のさらなる積極的な取り組みを応援していきたい。

参考文献

- (1) 日本語能力試験公式サイト www.jlpt.jp/about/index.html
- (2) 日本語能力試験「出題基準」(1994) 国際交流基金、日本国際教育協会
- (3) 森田良行・松木正恵(1989)『日本語表現文型』アルク

例文出典

- (1) 友松悦子・福島佐知・中村かおり(2011)『新完全マスター文法日本語能力試験N1』スリーエーネットワーク
- (2) グループ・ジャマシイ(2011)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版